

大塚康能君との共感

「大塚君の逝去」と聞き、あの流れる前髪とスマートな歩き方で「オタクは…」と一年生の最初の中庭の集会で声を掛けられた大塚諭君を思い浮かべてしまった。

大塚康能君は、三年時に同じクラスだったが、飾り気のない風貌で言葉少ない印象の彼とは言葉を交わした記憶がない。ただ一度だけロングホームルームの時間、彼がスックと立って自分の意見を堂々と述べたことがあった。確か「受験生としての私たちは今をどう過ごすべきか」と云ったテーマだったかと思う。彼は言った、世間では「灰色の受験生」などと言い、自分でもそんな風に思い込んでいる受験生もいるのかも知れないけど、僕は決してそんな風には思わない、自分で決めた自分の必死な生き方が灰色であるわけがない…、云々。真っ直ぐ前を向いて喋り終えて椅子に座った彼に、拍手こそ起きなかったが、私は自分の胸の内から共感した。そうだ、社会の声だとしても、自分でないものから自分が規定されてたまるか、という義憤のような共感だった。

彼の横顔を見上げるような位置に座っていた自分だが、その後で共に語り合うこともないままだった。半世紀以上前に一瞬通じ合った内面の共感の後、その後何の交渉もないまま互いの人生が過ぎ行き、大塚君は最後の十六年間で寝たまま過ごし、そして逝った。

「日経アート」の担当をされていたとのことだから、再会の機会でもあれば話も弾み、交友が始まっていたのかも知れない。

今、卒業アルバムを開くと、クラス全員がこちらを見据えている。大塚康能君が居て、皆が居て、自分も居る。私たちは一斉に何を見つめていたのだろう。

(2025/04/11 板見潤一)